

左側頭葉損傷によりProper name anomiaを呈した症例

【はじめに】左側頭葉損傷では部位によって言語能力にカテゴリー特性が認められていることが示されている。(Damasio1996)今回、左側頭葉前部の損傷により固有名詞の障害、漢字の失書、意味記憶の低下を認めた一例を考察を加えて報告する。

【症例】55歳男性, 右利き

【現病歴】自営の牧場で倒れている所を発見され緊急搬送。頭蓋骨骨折, 左側頭葉脳挫傷, 外傷性SAH, 急性硬膜下血腫が認められた。作話や徘徊が頻回にて精神科病棟に入棟。その後, 精神症状改善し2ヶ月後に当院へ転院

【神経心理学的所見】WAIS:FIQ83VIQ78PIQ91VC84PO101WM83PS60, RBMT:SPS15/24, SPA:有8-8-8無0-1-0, BADS:21/24.

【言語所見】SLTA:呼称13/20, 語の列挙7語。漢字は小学校2年生レベル。100単語呼称検査68/100。固有名詞検査:歴史上人物1/10, 建造物2/10, 著名人3/10。都道府県名3/47。意味記憶検査:野菜85%, 果物67%, 動物71%, 乗り物93%, 電気製品84%, 日用品82%, 楽器84%, 身体部位100%。

【経過】当初は障害認識が希薄で, 記憶面の低下も目立つ状態であったが, 経過とともに軽減し, 発症後3ヶ月頃から徐々に病識が出現。言語機能面に対しては言語の意味システムの賦活を目標に介入。発症後半年で意味記憶検査は全カテゴリー90%以上, RBMT:SPS21/24, 100単語呼称検査:96/100。漢字は小学校6年生レベル。固有名詞検査:歴史上人物5/10, 建造物7/10, 著名人5/10, 都道府県名:47/47となった。

【考察】記憶のhub機能を担うとされる側頭葉 (Miyasita2004) の広範な損傷により, 初期にはDamasioらが示している模式図で隣接している生物カテゴリーにて意味記憶の低下を認め, 病巣は中・下側頭回を含んでいる事から, 漢字に特異的な失書がみられた。本症例は頭部外傷が起因となり, 様々な症状が混在している病態であったが, 特に固有名詞の低下は顕著であった。退院時には地誌名や家族, 病院スタッフ名の想起は可能になったが, エピソードを追体験できない人物名は想起困難な状態 (貝梅ら2004) が継続していると考えられた。